東洋史研究
第三十三卷第二號　昭和四十九年九月　發行

ガルダンシレトゥーフトクトゥ攷

——清代の駐京フトクトゥ研究——

若松寛

はじめに

清代、北京に駐錫する喇嘛を駐京喇嘛というが、なかでも、黄教を闡揚するに力あったとして、清朝より國師・禪師などの名號を加えられた轉生喇嘛（活佛）をとくに駐京呼圖克圖とよぶ。後者は元來、概ね康熙・雍正年間に、勅命を以て北京に迎請せられた者であって、朝廷より京師に賜った坐牀寺に住し、夏期のみ避暑を兼ねてドロンノール（多倫諾爾）にも置かれた坐牀寺に滯在するのが普通であった。もとより活佛であるから、歴代轉生者を出し、駐京呼圖克圖の地位も承襲されていったのである。清末には、そうした駐京呼圖克圖が十二人あったとされるが[1]、その筆頭の地位にあったのが有名な章嘉呼圖克圖で、その初世にあたるガワンロブサンチョエデン Ñag dbaṅ blo bzaṅ chos ldan が康熙三十二（一六九三）年康熙帝に請ぜられて入京し、嵩祝寺に駐錫して以來、民國初まで六代の轉生者を算えた。歴代の章嘉呼圖克圖は北京のラマ教界に君臨し、その威を内外蒙古に振ったが、而してこれに次ぐ地位を占めていたとおもわれるのが、本稿で

取り上げようとするガルダンシレトゥーフトクトゥ Galdan siregetü qutuγtu（噶勒丹錫哷圖呼圖克圖）である。

歴代のガルダンシレトゥーフトクトゥの内で、最初に京師に駐錫したのは、ロブサンテンペイニマペルサンボ Blo bzaṅ bstan paḥi ñi ma dpal bzaṅ po（一六八九―一七四六?）で、雍正十二（一七三四）年勅命を奉じて來京、京師の黄寺 Ŝir-a sümeに坐牀した。駐京呼圖克圖としてのガルダンシレトゥーフトクトゥの誕生である。ロブサンテンペイニマを嚆矢として、以後その歴代の轉生者はいずれも駐京呼圖克圖の地位を承襲して、民國初に及んだ。この意味で、ロブサンテンペイニマの存在意義は大きいといわねばならないであろう。

本稿は、ダライラマ七世ロブサンカルサンギャムツォ Blo bzaṅ skal bzaṅ rgya mtsho の著作にかかわるロブサンテンペイニマの傳記を主材料にして、ロブサンテンペイニマの生涯を具體的に明らかにすることを主眼とするものであるが、併せて、その前代及び後代の轉生者の系譜の問題にもふれてみたいとおもう。こうした問題を通じて、清朝のラマ教政策の實體が一端でも解明されれば望外の幸せである。

ダライ七世によるロブサンテンペイニマの傳記は、左のタイトルである（本稿のチベット語のローマニゼーションには寺本式を用いた。從って引用文獻のローマニゼーションと一致しない場合があることを豫めお斷りしておく）。

Khri chen sprul paḥi sku blo bzaṅ bstan paḥi ñi ma dpal bzaṅ poḥi rnam par thar pa dpyod ldan yid dbaṅ ḥgugs paḥi pho ña[6]（以下、KCPK と略稱。東洋文庫藏）

これには、モンゴル譯も存在する。

Yeke siregetü-yin qubilγan bey-e sumadhi šasan-a suriy-a šari badr-a-yin rnam tar tegüs sinǰilel-ten-ü sedkil-ün erketen-i iregülügči ǰarudasun kemegdekü orusiba[3]（以下、YSQB と略稱。東洋文庫藏）。

その翻譯は原典に概ね忠實である。本稿では、原則としてチベット原典に依據したが、そのモンゴル譯もそのつど參照した。而して彼此のテキストに文義上著しく相異があれば、逐一指示することというまでもない。

上記の文獻の閲覧を許された東洋文庫當局に對し、深甚なる謝意を表したい。

一

ロブサンテンペイニマの直接の前生者は、ラサのガンデン寺座主 Dgaḥ ldan khri pa (Galdan siregetü) 第四十四代に就任したことのあるガワンロートェギャムツォペルサンボ Ṅag dbaṅ blo gros rgya mtsho dpal bzaṅ po (一六三五—一六八八。在任は、一六八二—一六八五) である。而して後者には、後述する如き二代の前生者があったとされる。

ところで、周知のように、ガンデン寺座主の地位はチベットの他の主な寺院での慣習とは對照的に、世襲もしくは轉生によって繼承されるのではなく、選擧と指名の手續きをへて、所定の學識と經歷を具備した僧の間から就任するものであった。[4]

從って、ガンデン寺座主が何人かのフビルガン (轉生者) たることは決してありえないのである。そうである以上、ガワンロートェギャムツォの前生者も後代に作爲された、[5] つまり加上の產物であるにちがいない。それならば、ロブサンテンペイニマがガワンロートェギャムツォのフビルガンと認定されたのは何故かということになるが、それは、ガワンロートェギャムツォを事實上の初代とするガルダンシレトゥーフトクトゥという新しいフビルガンの系列が新たに創立せられたということであって、それには、後述するように、特別の事情が存したのである。

ロブサンテンペイニマ傳 (KCPK) はロートェギャムツォの前生として、古い順に次の二人を置く。

(1) ジャムヤンタクルンタクパ

KCPK にこのジャムヤンタクルンタクパ Ḥjam dbyaṅs stag luṅ brag pa の傳記に充てられた部分は、ごくわずかしかない (3r/v; YSQB, 4r—5r)。それによれば、ツォンカパ入寂後百二十八年經た丙午 me pho rta の年 (一五四六) に、トェルン Stod luṅ 地方のタクルンのタク Stag luṅ brag に生まれ、ベルティ阿羅漢 Sbal ti dgra bcom pa の建立し

たキョルモルン Skyor mo luṅ 寺[6]で出家した(3r)。後、キョルモルン、サンガクカル Gsaṅ sṅags mkhar 學院[7]、ガンデン寺のジャンツェ Dge ldan byaṅ rtse 學院[8]等の法座に順次就任し、七十歲の乙卯 çiṅ mo yos の年(一六一五)に第三十代ガンデン寺座主に就任、四年在位して、七十三歲の戊午 sa rta の年(一六一八)に入寂した(3v)というのが、そのあらましである。

なお、このタクルンタクパという名は、生地に因む通稱であって、パクサムジョンサンの年表 Reḥu mig[9]や、チャハルのゲシェーロブサンツルチム Čaqar dge bçes Blo bzaṅ tshul khrims (1740—1810) のガンデンチパ表[10]等によれば、ロートェギャムツォ Blo gros rgya mtsho というのがその正式の名である。タクルンタクパのガンデン寺座主にかんする年次において、この兩書と KCPK 相互間に矛盾はない。

(2) スムパダムチョエギャムツォ

次いで設定されたのが、スムパダムチョエギャムツォ Sum pa dam chos rgya mtsho である。これについての記載はわずかに次のようにあるだけである。

それよりアムドのゴンルン Dgon luṅ の方面に、スムパダムチョエギャムツォ Sum pa dam chos rgya mtsho という、その方面の法・有情の糧となった一賢者が生まれたが、詳しい傳記の文言を見聞していないので、ここに書き寫すことができない(KCPK, 3v—4r; YSQB, 5v)。

しかし、パクサムジョンサンの年表によると(Reḥu mig, p. 65, 66)、スムパダムチョエギャムツォ(Sum pa slob dpon pa che ba Dam chos rgya mtsho)は、西寧のゴンルン寺の第二代(一六〇九—一六一五)及び第五代(一六二一—一六二七)座主として、兩次就任したと記されている(Cf. SE, S. 344, Liste der Äbte von dGon luṅ)。サガスター K. Sagaster 氏によれば、ゴンルン寺の急激な發展もこの人のおかげであるという。ただしその傳記の詳細は分らないとのことである(SE, S. 93)。

このように、スムパがタクルンタクパと同世代であることからも知られるように、前者を後者の轉生者としたのは、あまりにも杜撰な設定の仕方というべきであろう。

ところで、妙舟法師の『蒙藏佛教史』（下册、上海佛學書局、民國二十四年。以下、妙舟と略稱）、第五篇第三章駐京各呼圖克圖の第二節は、ガルダンシレトゥーフトクトゥの系譜を述べたものであるが（pp. 129—133）、その初めの方の部分を引用すれば、左の如くである。

第一世噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。爲黃教領袖。天性聰慧。將今有朱特多特之拉倉。新編成部。人民受持。教化大行。

第二世噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。誕生於前藏。坐噶爾丹廟經床。集法教之大成。

第三世噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。誕生於西寧札隆廟地方。博通經咒。廣涉史書。坐札隆廟經牀。宣衍法教。厥功甚偉。

右の第一世に關し、歷史上のいかなる人物に擬定したらいいのか、見當がつかない。この文意自體も不明瞭である。[13] テンペイニマ傳にも、右に該當する記載箇所は見當らない。

第二世は、明らかにジャムヤンタクルンタクパ＝ロートェギャムツォのことである。

第三世は、スムパダムチョエギャムツォのことであろう。ただし、そこに西寧の札隆廟とあるものは、ゴンルン廟のはずであるから、妙舟自らの用字法に従えば、格隆廟（第七篇寺院 p.25）と訂正さるべきである。

二

次がいよいよガワンロートェギャムツォペルサンボ Ñag dbaṅ blo gros rgya mtsho dpal bzaṅ po である。乙亥çiṅ mo phag の年[12]（一六三五）、ミニャクのラディン Ra ldiṅ[13] という處に出生した。父をタクチュクツェダル Rtag phyug tshe dar、母をツェモンギャル Tshe smon rgyal と言ったが、母はこの子の六歲のとき、熱病で亡くなった（KCPK, 4r; YSQB, 6r）。なお、轉生ラマの傳記の場合、必ず具備されるはずのフビルガン發見にまつわる記載はない。ロートェギャ

ムツォが後年第四十四代ガンデンチパに就任したことからすれば、それは至極當然のことである。

この子は、「小兒の時代から、煩惱の外力に征服された凡人達の性質と相等しくないことは勿論、恐怖を生じた場合には、無所縁悲讃 Dmigs brtse ma と持金剛 Badsra pāṇi の陀羅尼咒を誦して、天と喇嘛に祈願をなした」(KCPK, 4r; YSQB, 6r. Cf. ジクメ p. 277) という。

七歳(一六四一)のとき、母方の叔父 shaṅ (mo. naγaču) 醫師ジャムペギャムツォ Ḥtsho byed Byams pa rgya mtsho より、歸依發心の作法 Skyabs ḥgro byed lugs と憤怒黑女 Khros ma nag mo の灌頂の至福儀軌を隨持するなど、最初の密咒に入門した (KCPK, 4r/v; YSQB, 6v. Cf. ジクメ p. 278)。

智力が拔きんでて大きかったので、小兒の時からも文字などを容易に了解した (KCPK, 4v; YSQB, 6v. Cf. ジクメ p. 278)。

十一歳、乙酉の年(一六四五)、叔父のノモンハン No mon khaṅ[14] がハルハ Khal kha (Qalq-a) の首領ウイチン Uḥi chiṅ (Uyičing) に招請せられたとき、叔父と共にモンゴル地方へ赴いた。(中略)〔同年十月〕巳の日、ハルハとチベットの境界で、法主ノモンハン Chos rje no mon khaṅ が堪布となって、一切智甘庶種(=釋迦牟尼)の法の門に出家した。

その年から始めて、亥年(一六四七)まで、ハルハに居た。亥年の秋の仲の月の内にココホト Mkhar sṅon po (Köke qota) の叔父の地に歸って、卯年(一六五一)まで居た。叔父から怖畏現觀篋の教訓 Ḥjigs byed mṅon rtogs za ma tog gi luṅ を聽いた (KCPK, 4v; YSQB, 7r)。

右について、一、二檢討を加えたい。まず、叔父でノモンハン(法主の謂)の問題であるが、これが、その名を醫師 Ḥtsho byed (Emči) ジャムペギャムツォと稱せられること、上述から自明である。そこで想起されるのが、サガンセチェンのエルデニイントプチ Ergeni-yin tobči (いわゆる蒙古源流)の記述である。

それによれば、聖パドマサムバワ師の精神子なる大慈ジャムペギャムツォ Yeke asaraγči Bdsamba rǰamsu、その名をゲンドゥンペルサンギャムツォシュリーバダ Lgendün gbalbdsang rǰamsu siri bada (Dge ḥdun dpal bzaṅ rgya mtsho çrī bhadra) という、壬辰の年（一五九二）生まれの化身が、その十二歳のとき、ダライラマ四世の命により、モンゴル地方に座主 sirege eǰen が居ないからといわれて派遣され、その十三歳の甲辰の年（一六〇四）に來着して、直ちに聖一切智者ソェナムギャムツォ＝ウチルダラダライラマ（＝ダライラマ三世）のモンゴル地方の住座に卽き、大慈マイダリーフトクトゥ Yekede asaraγči (＝byams pa) Mayidari (＜Maitreya.＝Byams pa) qutuγtu と諸方に遍く稱せられた[15]、という。

また同書に、オルドスのボショクトジヌン Bošoγtu ǰinung は、その五十歳の甲寅の年（一六一四）に、マイダリーフトクトゥを招請して、新造成った釋迦牟尼佛尊像の開眼供養をしてもらい、フトクトゥに對し、大慈ノムンハガン Yekede asaraγči nom-un qaγan の尊號を奉った[16]、といわれる。

このように、KCPK のノモンハン＝ジャムペギャムツォは、エルデニイントプチのマイダリーフトクトゥと稱せられる人であったと考えられ、それがココホトに住座していたとみなされるのである。

次に問題とすべきは、ノモンハンをモンゴルへ招いたウイチンなる者の素性である。これに關しては、ハルハのサインノヤン部の祖、圖蒙肯（Tümenken）の十三子の內の第五子、

濟雅克（J̌iyaγ）。號偉徵諾顏（Üǰeng noyan）（外藩蒙古回部王公表傳・卷六九、喀爾喀賽因諾顏部總傳）。

が、それでないかとおもう。そもそも圖蒙肯は、初めハルハに紅教と黃教の爭いがあったとき、黃教を尊んで、これが護持をなしたので、ダライラマから、賢しとして、サインノヤンの號を授けられたが、その卒後、次子の丹津喇嘛 Danǰin blam-a もまたダライラマから諾捫汗（Nom-un qaγan）の號を授けられた。而して丹津喇嘛について、順治十二（一六五五）年清朝がハルハに八扎薩克を設けたとき、命ぜられて左翼扎薩克の一つを領した、などのことが知られている（外藩蒙古回部

王公表傳 loc. cit)。

このように、丹津喇嘛の年代などから按じて、その三弟に當る濟雅克をウイチンに比定することに支障はないようにおもう。實際上、この頃に、ハルハにウイチンと稱した人物は他には見當らないようである。

以上の點から、ジャムバギャムツォとロートェギャムツォの二人は、サインノヤン部の地方へ招かれたものと考えられる。

辰年（一六五二）、三界の衆生のラマといわれる一切智ガワンロブサンギャムツォ Ṅag dbaṅ blo bzaṅ rgya mtsho（＝ダライラマ五世）が東方の文殊皇帝 Ḥjam dbyaṅs goṅ ma（＝順治帝）の國家へ赴かれたとき、萬流王湖 Khri çor rgyal moḥi mtsho（＝ココノール）の岸邊で、叔父と共に、面謁して、百の良き供物を捧げた。面謁と說法の甘露を初めて受ける幸福となった（KCPK, 6r; YSQB, 9v. Cf. ジクメ p. 278)。

それより直ちにウィ地方に出立した。ラサを經て、同年十一月にはタシルンポに到着して、パンチェン一切智者ロブサンチョエキギャンツェン Blo bzaṅ chos kyi rgyal mtshan の許で、優婆塞 dge bsñen から沙彌 dge tshul までの戒を受け、隨許 rjes gnaṅ と教誡 luṅ を多く聽いた（KCPK, 6v; YSQB, 10v. Cf. ジクメ p. 278)。

次いでラサへ戻り、レボン Ḥbras spuṅs 寺に來て、癸巳の年（一六五三）春の初月七日、ゴマン Dpal ldan bkra çis sgo maṅ 學院の顯教學部 Chos grwa に入り、道理宣說の自在者なるゴマン＝チンレーフンドゥブ Sgo maṅ Ḥphrin las lhun grub から、學藝の門を開く因明正理の簡略なる說明の手引の法宴を最初に味った（KCPK, 7r/v; YSQB, 11r. Cf. ジクメ p. 278)。

右のチンレーフンドゥブについて一言すると、より正確には、ガワンチンレーフンドゥブ Ṅag dbaṅ ḥphrin las lhun grub といい、實はモンゴル出身の人である。ウィ地方のミンドル寺 Smiṅ grol glin の活佛であったことから、ミンドルノムンハン Smiṅ grol no mon han と號した。ノムンハン（＝Nom-un qaγan）の稱號は、ダライ五世から授けら

れたものである。而してゴマン學院長を一六六五年まで勤めたのち、同年、西寧へ來て、そのゴマン寺 Sgo maṅ dgon (Dgaḥ ldan dam chos gliṅ, Gser khog dgon pa, Bṭsan po dgon) 座主に就任、一六七九年、チベットへ歸った。しかし一六八九年には、すでに再びゴマン寺に坐牀していた、などのことが知られている (SE, S. 186 Anm. 425)[17]。

さて、ロートェギャムツォは、乙未の年（一六五五）に、ダライラマ五世から諸種の正法を聽受するを得たが (KCPK, 8r; YSQB, 12v. Cf. ジクメ p. 278)、二十七歳の辛丑の年（一六六一）蒙古暦三月にはタシルンポへ赴き、その二十一日に、パンチェン一切智者ロブサンチョエキギャンツェンを堪布となし、トェサムリン Thos bsam gliṅ[18] の師長を業師 las slob、ラパシャブドゥン Lha pa shabs druṅ[19] を教授師 gsaṅ ston となして、具足戒を受けた (KCPK, 10r; YSQB, 16r. Cf. ジクメ p. 278)[20]。

二十九歳、癸卯の年（一六六三）、ラサのタントラ學院として知られるゲンデンメギェ學院 Dpal ldan smad rgyud grwa tshaṅ[21] の夏期道場チュミルン Chu mig luṅ[22] に入學したが (KCPK, 11r; YSQB, 18r/v. Cf. ジクメ p. 278)、その年の十二月二十二日に、デヤン學院 Bde yaṅs grwa tshaṅ[23] の法座に卽き、而してこれを三年間持した (KCPK, 12r; YSQB, 20r. Cf. ジクメ p. 278)。

三十一歳、乙巳の年（一六六五）蒙古暦二月十日、レボン寺のゴマン學院長に就任した (KCPK, 12v; YSQB, 21r. Cf. ジクメ p. 279)。そしてこの地位を、癸丑の年（一六七三）三月に、ギャルセーフトクトゥ (Rgyal sras chen po Don grub rgya mtsho) に讓って、自らはその月の內に、メギェ學院 Dpal ldan smad rgyud grwa tshaṅ の院長に就任した。次いでその年の六月十七日を以て、ガンデン寺のジャンツェ學院 Dge ldan byaṅ rtse 長にも就任した (KCPK, 13v—14r; YSQB, 23r/v. Cf. ジクメ p. 279)。

四十六歳、庚申の年（一六八〇）五月、メギェ學院長を辭した (KCPK, 15v; YSQB, 26v)。

四十八歳、壬戌の年（一六八二）秋の仲月十五日、ガンデン寺 Dge ldan rnam par rgyal baḥi gliṅ において、三界

のラマ・三有の最上指導者なる妙主法王大ツォンカパの無畏獅子により支えられたる高き黄金座に雙脚を置いた（KCPK, 16r; YSQB, 27r/v. Cf. ジクメ p. 279）。

ガンデン寺座主に在任すること四年、一六八五年に至って、ロートゥギャムツォはこれを辭した。[24] というのは、同年、ダライラマ五世によって（周知の如く、すでにダライは一六八二年に入寂していた—その事實は祕匿されていた—から、實際にはデシ Sde srid のサンギェギャムツォ Saṅs rgyas rgya mtsho によって）、ハルハとオイラトの紛爭を調停すべく、ハルハへ派遣されたからである。[25] ここに彼の名は、清史料に、噶爾丹（亶）西勒圖として登場する。

その遣使に至る經緯については、すでに研究があり、[26] 別に考究すべき問題もなお殘されているが、詳しくは別の機會にゆずるとして、さしあたり紛爭自體のあらましだけを言えば、ハルハの左翼土謝圖汗が右翼扎薩克圖汗の逃衆を返還しないことから、兩者の間に軋轢が生じ、これに、豫てから前者を心よしとしないオイラトージュンガルのガルダンが後者を支援して介入したため、紛爭の激化を來したものである。康熙帝はハルハの兩翼汗の和解をはかるべく、ダライの影響力に期待した。ここに康熙帝の要請から、噶爾丹西勒圖の派遣が實現をみたのである。

康熙二十五（一六八六）年八月、ハルハの庫倫伯勒齊爾 Küreng belčir で行なわれた會盟において、兩翼汗はじめ、ハルハの主立った王公は、理藩院尚書阿喇尼 Alani の立合の下、噶爾丹西勒圖と哲卜尊丹巴呼圖克圖 Rje btsun dam pa qutuγtu（土謝圖汗の弟）の面前で、和解の誓いを交わした。しかし、この事を喜ばなかったオイラトのガルダンは、哲卜尊丹巴呼圖克圖に對し、噶爾丹西勒圖と抗禮したとして、ダライへの不敬を咎め、[27] 康熙二十七（一六八八）年、三萬の大軍を率いて、土謝圖汗領へ侵略を開始するに至ったのである。[28]

さて KCPK は、この間のロートゥギャムツォの行動を、次のように叙するのである。

それより東方の國家の無畏大座に文殊・天から生まれたる人主として顯現した康熙 Bde skyid 皇帝は、その方角に、法と衆生に定かに利益ある一ラマを派遣すべしと、一切智者ダライラマの御許に敕書を差し遣した。そのとき、一切

智偉大なる五代〔ダライラマ〕が他界へ赴かれたことは祕密の折であったが、從前の形式を以て、中國、モンゴルの地方へ赴くべしとの訓令があったのを、ラマの寶命であると思惟し、承受した。大勇猛心を具えたる菩薩らが、一有情の利益となるに過ぎぬとも、地獄で熱蓮花池に浴するとあれば、一大歡喜して入りし傳記のある如く、長い道途の疲勞など輕視して、赴かれたのであった。

當時、五濁が甚しく增長する時期の咎に苦しめられ、ハルハとオイラト Orod の部落が戰さを起こしたため、多くの衆生は欲しないまま、愛しむべき生命を棄てねばならぬなど、憤怒羅刹の界に到ったのと等しい頃であったが、良く發心せられたに依り、數年間は騷亂が鎭まって安穩であったが、最終的な和睦が見られなかったのは、衆生ら各自の所業、煩惱の果報成熟が頂點に達したものであって、三世の普き佛をしても、翻轉することはできないのである。

天より生れたる人主と謁して、益々盛大なる供養と恭敬とを以て讃嘆せられた。それより、中國、モンゴルとアムド方面の多くの衆生のために、正法の運分を授けるなど、見、聞き、念じて觸れたる全ての者に、現世普き利益となる無盡の法施の門扉を廣く開いて、今生の敎化さるべきものは敎化するなどを成就して、暫時安靜に睡る快樂に心が奪われた如くなって、アムドの方面で發病した。痛疼など、凡夫の如きの不幸の相は全くなく、精神は法界に沒した（17r/v; YSQB, 28v-29v）。[28]

右の記事の內、とくにガルダンシレトゥが康熙帝と謁した問題について、若干述べておきたい。

これに關して、章嘉フトクトゥ一世ガワンロブサンチョヱデン Ñag dbaṅ blo bzaṅ chos ldan (1642—1714) の蒙文傳記スブドエリケ Subud Erike (一七二九年シェラブダルギェ Çes rab dar rgyas 撰) に、重要な對應記事がある。今はその要旨だけを述べると、次の如くとなろう（SE, SS. 216—217 Übersetzung 58v—60r）。

乙丑の年（一六八五）、ガルダンシレトゥ＝ガワンロートゥギャムツォ Galdan-siregetü Vāgindra mati samudra

(=Ṅag dbaṅ blo gros rgya mtsho) がハルハとオイラトの宗教的政治的問題 (Qalq-a oyirad-un šasin törü-yin kereg) の〔調停の〕ために、チベットを出立し、ココノールに到着したとき、章嘉(當時ゴンルン寺に住した)はこれに面謁するために來たところ、私と一緒に行け、と強く勸められたので、隨行した。[29]

丙寅の年(一六八六)、クレンベルチル Küreng belčir という地に、北方の有情の歸依處なる哲卜尊丹巴をはじめ、ハルハ七旗の王公ら、オイラトの三王公、文殊大皇帝の使者、ラマ、貴人らが會盟した。その折、(ラマ、王公など大勢がシレトゥに)說法を乞うたが、章嘉はその補佐を勤めた。但しシレトゥが宗教的政治的問題のため、間暇がなかったので、說法を乞うた者の大方は、章嘉から法を聽いたが、誰一人として滿足しない者はなかった。

丁卯の年(一六八七)、ガルダンシレトゥは北京へ赴いて、正月の大祈禱會の導師 (čaγan sar-a-yin yeke irügel-ün eki) となった。その折、文殊大皇帝と兩度年賀を交換したが、皇帝は章嘉に對し、シレトゥラマに倣って目の當たりに年賀を奉ぜよ、と仰せられた。その如くに章嘉は爲した。第一回の年賀交換の場合には、皇帝は章嘉に對し、他の者より多く優渥なる語を賜い、これと尊貴の語を交した上、絹布などを賞賜した。第二回のその場合には、敕命を以て、栴檀佛 Čandan joo (栴檀寺の本尊) の前でネーニンーフトクトゥ Gnas rñiṅ qutuγtu と章嘉とが法語を交したので、皇帝はいたく喜んで、吉祥ハタク (sayisiyal-un qadaγ) を賜った。章嘉の驚嘆すべき資質に魅せられた皇帝は、汝と經頭 (Nom terigülegči yeke daγutu=Dbu mdsad ガルダンシレトゥに非ず) の二人は北京に留まれ、と仰せ出されたが、シレトゥは巧妙に全員の暇を乞うた。皇帝はこれを嘉納し、その意圖を斷念した。

以上の主旨は、會盟の部分を缺落させるだけで、他は概ねジクメ (pp. 283—284) と等しい。ところで、アーマッド氏は、そのジクメの記事に對して否定的見解をとり、(會盟の後)ガルダンシレトゥが中國帝と謁したといわれるが、十七世紀の中國又はチベットの史料にそのことの裏付けがないから、後代の傳承として排除されねばならぬ (STR, p. 268) と言っている。しかし前述の如く、その裏付けは KCPK, SE 兩書に存在する譯であり(尤も兩書はいずれも十八世紀前半の著

述ということになるが)、ましてSEは章嘉一世の自敍傳 Rnam thar bkaḥ tsom[31] に大巾に則ったものであるから、その史料的信憑性はきわめて濃いといえる。要するに、皇帝との謁見は、二度行われたのである。

ここで、妙舟の記事を揭げておこう。

第四世噶爾丹錫喀圖呼圖克圖。誕生於西寧。迎赴前藏。在噶爾丹廟講經。闡揚精義。信仰益深。淸聖祖仁皇帝。特召來京。旋奉旨赴額魯特喀爾喀講經。蒙古衆汗王喇嘛台吉等奉爲敎主。丁卯年回京陛見。命在京各廟講經。僧徒皈依者益衆(第五篇 pp. 129—130)。

この文は、概ね事實を傳えたものといえるが、ガルダンシレトゥが往路にも北京に立寄ったとされる點が異色である。筆者としては、この點を疑問視するが、さりとてこれを斷乎否定する根據を今は有しない。

かくして、ガルダンシレトゥはチベットへの歸途、アムド付近で入寂[32]したが、時に一六八八年[33]であった。[34]

三

ガルダンシレトゥ=ガワンロートェギャムツォペルサンボの轉生者がロブサンテンペイニマペルサンボ Blo bzaṅ bstan paḥi ñi ma dpal bzaṅ po (Sumati śāsanasūrya śrībhadra) である。既述の如く、ガワンロートェギャムツォは活佛ではなかったから、その轉生者があるはずもないのであるが、實際にこれが出現したことは、新たに轉生ラマの系列が創設されたことを告げるものである。

さてロブサンテンペイニマは、己巳の年(一六八九)蒙古暦一月四日、ツァガンノムンハン Čaγan nom-un qaγan[35] (Tsha gan no mon han) と普く稱せられる大堪布寶 Yeke ubadini erdeni (Mkhan chen rin po) ガワンロブサンテンペイギャンツェンペルサンボ Ñag dbaṅ blo bzaṅ bstan paḥi rgyal mtshan dpal bzaṅ po 及びウイチェン台吉 Üičeng tayiji 二兄弟の內の、兄なるウイチェン台吉[36]の子として出生した。母をロモキ Glo mo skyid と言った

(YSQB, 31v; KCPK, 18v)。その誕生の地は、ココノールの西方ヤンサン Ya̓n bza̓n とされる。[37]

これが化身として認定されるまでには少しく經緯がある。それについて、テンペイニマ傳 (YSQB, 34r/v; KCPK, 19v—20r) から、あらまし述べよう。[38]

庚午の年（一六九〇）、ココノールの王座者 Köke naγurun qaγan siregetü (Mtsho sṅon gyi rgyal po khri pa) ダライフンタイジ Dalai qung tayiji[39] が重病に陥ったので、大堪布ツァガンノムンハンは使者を介してその大テントへ請ぜられた。同じく招請の使者は章嘉ガワンロブサンチョエデンにも派遣された。[40] こうして兩大ラマはフンタイジの大テントで邂逅した。フンタイジはそのまま同年亡くなったが、初七日の法要も濟んだ一日、章嘉は大堪布の宿泊するテントを訪れて、これと歡談した。その話の末、大堪布に對し、章嘉から「汝の兄のタイジに一化身ありと聞くが、眞か」と質問があった。大堪布は、「化身かどうか今まだ明らかでないが、よい素質を備えている」と答えた。そこで章嘉は他の大勢のラマをテントの外へ出させ、一人殘った大堪布に對し、「あの幼兒は座主寶の化身と判斷する。座主寶が法界に赴かれるとき、私共大勢が化身のことをお願いしたが、返事ははっきりとは無かった。その後、私が一人侍っているとき、私に對し、ツァガンノムンハンと汝の二人だけで質問せよ、といわれた。また、先にクンブム付近の大テントに坐しておられるとき、汝自身拜謁に行ったときにも、兄弟二人に說いて下さった道理など、どこを審べても、わがラマの化身そのものである」との見解を表明した。大堪布もこれに同意した。そこで大堪布は、萬全の手をうつ意味で、化身の懸記を乞う使者をチベットに派遣した。パンチェンラマ、ネーチャン Gnas chuṅ、ラモ La mo らの懸記は等しくその子を大座者の化身とするものであった。

章嘉はこのことを聽いて、壬申の年（一六九二）、先のシレトゥの監理者 Dbon po であったビントゥ法主ドンドゥブギャムツォ Bin du (Bingtu) chos rje Don grub rgya mtsho らをこの子のもとへ派遣して、化身としての試驗をさせた。ドンドゥブらはこの子と面會して數日間を過した。大堪布とデチェン寺法主 Bde chen chos rje[41] の二人

は、懸記が明らかとなった次第と、この子をしばらくデチェン寺に招くべしとする理由とを認めた書信を、ドンドゥブに託して、一行を送り歸した。かくして、癸酉の年（一六九三）六月、化身はデチェン寺に盛大に迎えられ、出家して、名もジャムヤンギャムツォ Hjam dbyans rgya mtsho と授けられた。

以上要約したところからも、ガルダンシレトゥの化身は、章嘉フトクトゥとツァガンノムンハン、就中、前者の主導下に創出された如く判斷されるであろう。それでは化身が青海タイジの子から選ばれた理由は、どこにあったというべきであろうか。

結論的には、筆者としては、サガスター氏の次の發言の範圍を出ない。「章嘉フトクトゥが、ツァガンノムンハンの甥を化身に選ぶべく公然と努力した事實は、疑いなく一定の意味を有する。この手段を以て、彼は青海の大ラマの歡心を買い、同時に、後者が青海王侯の弟であったことから、貴族層の好意も得た。こういうふうにして章嘉フトクトゥはこの階層に對し影響力を得ることができた。それを以て彼が果していかなる特別の目的を追求しようとしたのかは言い難い。おそらく今後の研究が、この問題に光を投じうるであろう」(SE, S. 104)。今はこの發言を補足する意味で、同氏が十分に言及されなかったツァガンノムンハンの青海貴族に對する地位に關し、一中國史料を紹介しておきたい。

康熙三十六（一六九七）年三月、漠北ではオイラトのガルダンが、康熙帝の親征を受けて進退窮した頃、康熙帝は使者阿喇布坦らを青海へ派遣して、諸台吉を入覲せしめんとした。

三月。阿喇布坦等。至察罕托羅海。察罕諾捫汗迎告曰。皇上令青海衆得享安樂。永受恩澤。何幸如之。時顧實汗子惟達什巴圖爾存。阿喇布坦等宣諭之。達什巴圖爾議遣博碩克圖濟農。及額爾德尼台吉。代入覲。阿喇布坦等語曰。皇上駕臨寧夏。爾當率衆往朝。毋自誤。達什巴圖爾偕察罕諾捫汗。善巴陵堪布[48]。及唐古特達賴汗子拉藏等。檄諸台吉。議欲四月起行。〔中略〕閏三月。阿喇布坦。德木楚克。自青海歸。議諸台吉至若露處。未協朝典。應令秋後入覲京師。詔如議。[49]

ここから、十分明瞭な形で表わされてはいないものの、ツァガンノムンハン（察罕諾捫汗）が青海の諸台吉の間に、一定の政治的影響力を有した大活佛であったことが窺われるであろう。

さて、ガルダンシレトゥの化身は、丙子の年（一六九六）、デチェン寺の顯教學部に入學した。己丑の年（一七〇九）、ジャムヤンシェーパがデチェン寺に立寄ったさい、[14] 化身からこれに起請 dam bcaḥ と教相の所見を提出したところ、その智慧を大いに稱讃されたという（KCPK, 21v—22v; YSQB, 37r—38v）。その後、化身は、辛卯（一七一一）から甲午（一七一四）の年まで、ゴンルン、ゴマン、クンブム、ラブランの諸大寺を廻って、研鑽を積んだ（KCPK, 23r—27r; YSQB, 38v—45r）。

乙未の年（一七一五）、ダライラマ七世カルサンギャムツォはラザン（拉藏）汗の追求を避けて、青海へ蒙塵したが、[15] その夏、大堪布と化身の叔父・甥兩人から、大堪布の居處シルゴル Širγol[16]（碩爾郭爾）へ招待された。このときダライは乞われるままに、叔父・甥兩人に長壽灌頂を授けた（KCPK, 27v—28r; YSQB, 45v—47r）。

壬寅の年（一七二二）、叔父・甥二人してチベットへ赴いた。その年の蒙古暦十月二十三日、化身はタシルンポのパンチェン一切智者の許にて具足戒を受け、このとき名をロブサンテンペイニマ Blo bzaṅ bstan paḥi ñi ma（Sayin oyutu šasin-u naran）と授けられた。時にテンペイニマ、三十四歳であった。ついでラサへ戻り、ダライ七世から灌頂と各種の隨許を授けられた。翌癸卯の年（一七二三）正月、モンラム Smon lam の節に、ダライ七世からテンペイニマに對し、侍者としてポタラに留まれとの懇請がなされたが、これは、大堪布から、自分がもはや高齢であるのと、テンペイニマをアムドの方面の寺院の主となすべきであるからとして、辭退がなされ、嘉納せられた。かくしてその春、二人は故郷に向って出立した（KCPK, 29v—30v; YSQB, 48v—50v）。

丙午の年（一七二六）、テンペイニマはデチェン寺の座主に就任した。而してその在任期間は、甲寅の年（一七三四）雍正帝の招請に應じて北京へ來錫するまで、九年に及んだのである（KCPK, 31r; YSQB, 51r）。その間の彼の行狀に、特に取

立てて述べねばならぬ點はないようである。ただ戊申の年（一七二八）に、叔父の大堪布ツァガンノムンハンが入寂したことが（KCPK, 31v; YSQB, 51v—52r）、注目される。これに關して、テンペイニマは、辛亥の年（一七三一）、チンワンダイチンホショチ Čin wang Dayičing qošoči（親王載青和碩齊）[47] の本營へ赴き、その化身の懸記を求める問題につきチンワンと協議した。その結果、故ノムンハンの侍者らとチンワン始め青海の王侯らの間から、チベットへ使者が立てられた。癸丑の年（一七三三）の秋の初月に至って、大堪布の化身がアリク Arig[48] 方面に出現したので、これを認定して、シルゴルの大ラマ包の前生者の座に招じたという（YSQB,53v—54r; KCPK, 32v—33r）。

四

さて、雍正帝の招請狀は、甲寅の年（一七三四、雍正十二）蒙古曆四月に、テンペイニマの許に屆けられた。彼は直ちに西寧城 Zi lin mkhar に赴いたが、西寧の大臣 Tā shin（Dayamal）から、ラマの意向と合わせて安樂に迎請せよとの敕命が下されているので、暑熱が去って涼しくなってから赴かれたがよい、といわれたので、一旦引き返し、蒙古曆七月十九日、改めてデチェン寺から出立した。西寧城では、檀越たる青海王侯らの盛大な見送りがあって、同月二十九日これを出立、同年九月中旬に入って北京北郊の黃寺 Lha khaṅ ser po（Sira süm-e）に到着した（KCPK, 33v—34r; YSQB, 54v—56r）。

ところでその招請の理由であるが、殘念ながらこれに十分な解答を與えることができない。ただ次の如き事情と關係があるのではないか。これより先ダライラマ七世は、一七二八年來、四川の泰寧に亡命中であったが、一七三四年に至り、清朝は、チベットの政情も安定したとみて、ダライのポタラ歸還を許可することとした。そこで、その旨を直接ダライに傳達するため、勅使を派遣することとし、正使に果親王允禮（康熙帝の第十七子）が選ばれた。そのさい章嘉フトクトゥ二世ロルペイドルジェ Rol paḥi rdo rje（一七一七年生、二四年京師來錫）も同行を命ぜられた。一行は十月北京を出

立した。果親王は使命を果して直ちに、翌年正月を以て歸途についたが、章嘉フトクトゥはそのままダライに侍してラサへ赴いた。[55] それは勿論豫定の行動であった。

こういう譯で、章嘉の長期北京不在が豫定されており（實際に彼が歸還したのは、一七三六年五月のことで、[56] それも雍正帝の死去があったため、豫定を繰上げたものである）、これをカバーする意味合から、テンペイニマの招請が實現を見たのではなかろうか。事實、章嘉の不在中は、その地位を代行するが如く、一七三五（雍正十三）年正月の大祈願會の首座を勤め、その八月に至っては、敕旨を以て「京師の掌印ラマ Tham ga (Tamar-a) bla ma[57] を暫時勤めよ」と命ぜられたのである（KCPK, 35v—36r; YSQB, 57v—58r）。

さてテンペイニマが黄寺に到着すると、章嘉は敕許を得て、同年九月十五日これを黄寺に訪問した。このとき章嘉から、席の上座につくよう求められたが、テンペイニマは却って「あなたは大皇帝のラマ Goṅ ma chen poḥi bla ma なのだから」といって、章嘉に上座を讓ったと記されている（KCPK, 34v; YSQB, 56r）。ついでこの後、十月に、上述の如く、章嘉は敕使に加って出立したが、別離に臨み、テンペイニマは、章嘉に對し、乞われるままに長壽灌頂を獻じた（KCPK, 35r/v; YSQB, 57r/v）。

皇帝からは、同年九月十九日を以て、圓明園 Skyed mos tshal (Yüṅmiyen) にて謁見を賜った。このときテンペイニマから佛像とハタクを獻じたところ、皇帝は手づからこれを受領し、種々の敕語と賞賜が下された（KCPK, 34v; YSQB, 56v）。

ついで十一月十三日には、敕旨を以て、禪師印 Chan ḉiḥi tham ga と誥命 luṅ las を授けられた（KCPK, 35r; YSQB, 57r）。これに關しては、大清會典事例・卷九七四、理藩院・喇嘛封號に、左の如く見える。

〔雍正十二年〕封噶勒丹錫呼圖爲慧悟禪師。給予敕印。

また妙舟（第五篇 p.130）にも、左の如くいう。

第五世噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。誕生於庫克瑙。少時赴藏習經。學成之後。適奉清世宗憲皇帝諭召。來京陛見。於雍正十三年。寵錫榮典。勅封爲慧悟禪師噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。其册封文曰。黃教創自西天竺國。推傳至東土。以開悟衆生。此中思及繼傳。如有敬謹誦經守教者。朕實嘉念。噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。世世著名大喇嘛。行高品重。博學經典。精通佛法。今特封爾爲慧悟禪師。爾尤宜專心修守。勤思深造。廣衍上傳。謹紹佛道。以副朕嘉獎恩施之至意。勉之。並勅建仁壽寺。作爲駐錫京師之倉。

ところで妙舟のいう仁壽寺については、同書第七篇寺院、第二節北平之寺院の項にもその名が實は見えない。その名自體に誤りがないとすれば、一體どの寺を指したのであろうか。KCPK, 36r（YSQB, 58v）によれば、テンペイニマは、乙卯の年（一七三五、雍正十三）の蒙古暦十月二十五日を以て、梅檀寺 Tsan dan jo bohi lha khan（Dsandan joo-yin sim-e）の座主に就任したことから、梅檀寺が仁壽寺の別稱ということになろう。ただし梅檀寺にはすでに宏（弘）仁寺（宏の字は、乾隆帝の諱、弘曆を避く）という正稱があるが、次に揭げる妙舟の記事（第七篇寺院 p. 75）を讀めば、仁壽寺は宏仁寺（梅檀寺）と同一であるといえよう。ただし、それは雍正十三年に敕建されたのではない。

宏仁寺。　在太液池西南岸。地最爽朗。爲明清馥殿舊址。康熙四年。改建爲寺。有御製碑記。寺前建二坊。寺門內有白石。方池上跨三梁。池西作龍首。自牆外汲太液池水貫注之。綠荷出水。朱魚吹藻。池北天王殿。殿東西峙鐘鼓樓。再進爲慈仁寶殿。左曰弼教。右曰翊化。又進爲大寶殿。左曰普慧。右曰覺德。康熙四年。移鷲峯寺旃（梅）檀佛像於寺之正殿。寺因是並有旃（梅）檀之名。聖祖御製旃（梅）檀佛歷代傳祝記。乾隆二十五年。又發帑重修。有御製碑文。屬噶勒丹錫哷圖呼圖克圖所轄。

庚子之役（義和團の亂）。燬於兵燹。寺舊有塔一座。高三丈。建築莊麗。宣統元年毀之。攝政王就寺基改建爲禁衞軍之辦事處。降及民國。已數改爲軍事機關之辦事處矣。

乙卯の年（一七三五、雍正十三）、上述の如く、テンペイニマは正月の京師の大祈願會の首座となったが、三月には、敕旨

を以て、夏季はドロンノールに避暑することを許されたので、この月二十日北京を出立した。そしてドロンノール滞在中、雍正帝の訃報を得た。直ちに歸途につき、道を急ぎ、九月六日北京に到着した。新帝乾隆と謁し、先帝の法要を執り行えと敕があったので、ミンドルノムンハンの化身 Smin grol no mon han gyi sprul sku はじめ、京師、ドロンノール、ココホト等の衆僧を集め、一百餘日間、先帝の冥福を祈った（KCPK, 35v—36r; YSQB, 57v—58v）。

丙辰の年（一七三六、乾隆一）、前年に同じく、正月の大祈願會の首座を勤めた。ついで十七王 Rgyal sras bcu bdun pa（果親王允禮）に對し、ヘーヴァジュラと金剛亥の灌頂 kyai rdo rje dań rdo rje phag moḥi dbań、大黒天・閻摩兩つの隨許 mgon chos gñis kyi rjes gnań を獻じた（KCPK, 36v; YSQB, 58v—59r）。十七王については、前述の如く、泰寧滯在のダライ七世に對し敕使として派遣された人であるが、ラマ教の熱心な保護者としても有名で、彼の發願によって若干の經典のモンゴル譯開板すらなされたこと、PLB, SS. 69—71 に詳しい。この年には、章嘉が歸國した。そのせいか、それ以後、庚申の年（一七四〇、乾隆五）まで、テンペイニマに目立った動きがない。

辛酉の年（一七四一、乾隆六）、乾隆帝は、甘殊爾については康熙帝の敕命により、モンゴル語に翻譯されて開板されたが、丹殊爾に關しては未だそのことがないとして、章嘉寶とこの正者（ガルダンシレトゥ）の兩名に對し、丹殊爾を盡くモンゴル語に翻譯すべし、と敕を下した。このために、チベットから明處の賢者若干名と、四十九旗モンゴル、七旗ハルハ、八旗チャハル等からラマ、カプチュ Bkaḥ bcu、ラブジャムパ Rab ḥbyams pa、國師 Gu çri 等の文字類と教理に通曉する者を普く集め、それらの筆頭に兩正者を置いて、壬戌の年（一七四二、乾隆七）から翻譯作業が開始されたという（KCPK, 37r/v; YSQB, 60r—61r）。

これについては、同じくこの記事にも着目して、すでにハイシッヒ氏によって秀れた研究が出されている（PLB, S. 85 f）。それに從って結論的にいうと、翻譯作業は、實はすでに一七四一年十二月に開始されており、その全體の完了をみたのが一七四九（乾隆十四）年四月とされる。

癸亥の年（一七四三、乾隆八）、章嘉とガルダンシレトゥは乾隆帝の盛京行幸に扈從し、十月に入って北京に歸ったが（KCPK, 38r/v; YSQB, 61v—62v）、ついでその冬、皇帝は兩正者の許に敕使を派遣し、かつて世宗の潛邸であった雍和宮を改修してラマ寺院となす旨の敕を賜った。

この帝都北京の地は極めて偉大にして、諸の父祖皇帝の時代に教風は廣く靡いたものの、內外の明處を普く說明聽聞する大習風は弘通していない。今や佛法一般と特には黃帽警ある教法を弘通することは、諸の父祖皇帝の心意を滿足せしめ、衆生の幸福を增上するであろう。かかる觀點から、父帝が王であった時居住せられたこの寢殿に、佛殿、集合堂、僧房等ある大寺院を新たに建立して、五明處を說明聽聞する學院を新設せよ。

と、末曾有の敕命を下した（KCPK, 39r; YSQB, 63r）。

ここにおいて兩正者は歡喜し、チベットから賢者を招請すべきことを上奏し、直ちに嘉納せられた。新寺院は翌甲子の年（一七四四、乾隆九）に至って完成を見た。これには、モンゴル・チベット・中國の各地から集められた五百人の學僧が收容され、これらを指導するためのチベットの賢者も折よく來着した。丙寅の年（一七四六、乾隆十一）、乾隆帝は新寺院の大祈願會に臨御した。

同月（二月）一日、大自性者（皇帝）も法會の中央に出られた上、兩正者（章嘉とガルダンシレトゥ）に對して教法の論議をなさしめ、亦、新寺院の二人の學僧が祈誓をなす間、多くの善知識をして論議を行わしめて、〔この大祈願會を〕ラサのモンラムの如く命名する習慣を定めしめた。

皇帝の御前において、ラマ僧伽集會のために、章嘉寶は說法した。兩ラマに對して座蒲團と、もたれ等の必需品を主とする妙好の物を賜い、それ以下のラマ學僧らに對しても、位階に應じた莫大な賞賜を下賜した（KCPK, 41r; YSQB, 65v）。[35]

以上の記事を最後として、テンペイニマの活動はもはや實質的には辿ることができない。テンペイニマ傳は、以上に續

けて、この頃、チベットから堪布 Mkhan po とナンソ Nań so の二ラマが、テンペイニマの健康を問うために、派遣されて來たといい（KCPK, 41r; YSQB, 65v）、それを以て傳記的敍述を突然打切っている。その葬儀に關する記事も全く見られず、ただこの後、生前彼の所有していた佛像や儀器でデチェン寺に寄贈された品々のリストが記されるにすぎないのである（KCPK, 41vf; YSQB, 66rf）。

ハイシッヒ氏によると、ダライラマ七世がテンペイニマ傳の執筆を完了したのが一七四八年ということであるから（同氏はダライ七世の傳記に、それについての記事を見出している（PLB, S. 93）、テンペイニマが入寂したのもそれ以前ということになる。結論的には、やはり同氏に從って、一七四六年頃（Ibid）ということにしておきたい。なお、妙舟にあっては、前掲の第五世噶爾丹錫哷圖の文に續けて、「乾隆十六年。奉旨賞給慧悟禪師印。二十七年。奉旨封賞商卓特巴札薩克喇嘛印」として、全體の文を結んでいるのであるが、實は禪師の印を賞給されたのは雍正十二年のことであり、また商卓特巴札薩克喇嘛の印も噶爾丹錫哷圖呼圖克圖自身に授けられたものではないのである。なぜならば、商卓特巴 šangjodba なるものは、sang-yin phyag mdsod pa に由來し（SE, S. 204 Anm. 585）、活佛の居住する僧坊（sang）の管理者を意味するものであって、活佛自身に與えられる稱號ではないからである。事實、會典事例によれば、この場合、

〔乾隆〕二十六年復准。噶爾丹錫哷圖呼圖克圖之徒弟昆楚克敦珠布（＝Dkon mchog don grub）。賜總管噶爾丹錫哷圖呼圖克圖屬下徒衆札薩克喇嘛商卓特巴印信。（卷九七四、理藩院・喇嘛封號）

とある。妙舟はあるいはこのことを誤解したのではなかろうか。

五

さてロブサンテンペイニマの後代の轉生者の問題であるが、前述の如く、KCPK にはこれに關する記事を全く缺くのに對し、妙舟には次の記事が見える（第五篇 p. 130）。

第六世噶爾丹錫呼圖呼圖克圖。誕於外蒙三音諾顏部。爲和碩親王成袞札布第三子。發揚黃教。廣衍經典。蒙族咸尊崇之。

なおこれが第六世に關する記事の全てでもある。このように妙舟は轉生者が成袞札布の第三子として出現したというが、外藩蒙古回部王公表傳・卷七〇、扎薩克和碩超勇襄親王策棱列傳によると、成袞札（扎）布の第三子は敏珠爾多爾濟といい、公の品級に封ぜられた人であるから、それとは明らかに別人である。妙舟には何か誤解があるのではないか。[33]ここで、章嘉二世ロルペイドルジェの傳記 JLBC によると、その乾隆四十九（一七八四）年の條に、

先に大座者 Yeke siregetü gegen ten は一化身として出現したが、久しからずして涅槃に入ったので、沙門らがフビルガンを捜し、試驗の事を爲しつつあったとき、この聖（＝章嘉）の夢に、大座者が現われて、この聖に法語 bkaḥ bsgo と祝福を授け、大座者の護持する多くの尊像を列してある内、黃で彩色した部分などに塵がついていたのを、大座者がこの聖に對し、これらの尊像は私の守護神である。塵がついたのを汝が拭え、といったので、掃除をした。この聖は大座者に、どこに坐しているのか、と尋ねると、ラロ Ra lo という地に坐している、と答えるのを夢見た。後、フビルガンの出生した場所がブムルンタシタン Ḥbum lun bkra ĝis thaṅ という地であったので、先の夢と非常によく合致した（171v—172v）。[34]

とあり、テンペイニマの化身が早く入寂し、その次代の化身が西寧方面に出現したことを傳えるのである。[35]但しその場合、次代の化身が乾隆四十九年に出生したという意味では毛頭ない。これは、その翌年に、次代の化身が入京したため、書物の編纂上そこに置かれたに違いないのである。卽ち同書の乾隆五十（一七八五）年の條に至って、

その冬、持金剛大座者ロブサンテンペイニマ Včir dhar-a yeke siregetü Blo bzaṅ bstan paḥi ñi ma の化身ガワントゥプテンワンチュクチンレーギャムツォ Ṅag dbaṅ thub bstan dbaṅ phyug ḥphrin las rgya mtsho もツァンから新たにやって來た。このとき、この聖（＝章嘉）と京師 Beĵing qota の大ラマらは黃寺 Sira sûm-e の西ま

で出迎えた。父子の如きこの二人のゲゲンは、前生の時代から互にラマ・沙門の關係を結び、法と誓いの因緣が甚だ良いので、會っただけで心がよく合い、歡喜の多くの意に適う言葉を交した。この聖は持金剛大座者の化身ガワントゥプテンワンチュクチンレーギャムツォの頭と顏を手で撫でて、「おお、この私のラマは確かに居る」といって、[29]心はいたく喜び、新來者のために盛大な果物・精進料理の宴を獻じた。

それより化身は京師の宮殿に赴き、この聖と共に、聖主に謁したとき、聖主も心は甚大に喜ばれて、座席も尊者（＝章嘉）と等しくなし、化身の手相の繪を御覽になった。また「尊者は機嫌はどうか」と仰せられて、黑貂の衣服と施物など靈妙なる賞を賜った（175v—176v）。

とあり、乾隆五十年に新しい化身ガワントゥプテンワンチュクチンレーギャムツォが入京して、乾隆帝に謁したのである。以上の記事から考えると、ロブサンテンペイニマが乾隆十一（一七四六）年頃入寂してから、乾隆五十年までの約三十九年間に、一人の化身の入寂とその次の化身チンレーギャムツォの入京があったことになる。このチンレーギャムツォは、ジクメ（p. 319）によると、章嘉呼圖克圖三世イェシェーテンペイギャンツェン Ye ḥçes bstan paḥi rgyal mtshan と並んで、嘉慶帝の供養所であったという。[30]またこれは、年代的に、妙舟のいう（第五篇 pp. 130—131）第七世噶爾丹錫呼圖呼圖克圖ということになろう。

第七世噶爾丹錫呼圖呼圖克圖。誕於西寧札木撮揣普藏地方。清乾隆五十五年。奉旨署理京城札薩克達喇嘛印務。嘉慶十三年。奉旨派赴西藏。往聘達賴喇嘛坐經床喜兆。

右の內、誕生地の西寧の札木撮揣普藏 Cha-mu-ts'o-ch'ui-p'u-tsang が何の對音か實はよく分らないが、一應 Rgya mtsho chu bzaṅ と還元しておきたい。前述の如く、チンレーギャムツォは西寧のブムルンタシタンで出生したが、その地にはチュブサン寺 Chu bzaṅ dgon が建っていた。この點からすると、揣普藏はチュブサン寺の建つ地を言ったのかもしれない。札木撮については見當がつかない。次に、乾隆五十五年に命ぜられて、京城札薩克達喇嘛の印務を署理した

という點についてであるが、この場合は、章嘉二世が乾隆五十一年四月に入寂したことと關係があろう。次代の章嘉三世は乾隆五十二（一七八七）年五月出生し、その八歳の乾隆五十九年初めて來京した。十四歳のとき、敕命により、チベットへ留學し、二十歳の嘉慶十一（一八〇六）年に北京に戻った。京師のラマの最高位たる京城札薩克達（大）喇嘛に封ぜられたのは、やや遲れて三十三歳の嘉慶二十四（一八一九）年のことであったという（妙舟第五篇 pp. 100—103）。從ってチンレーギャムツォは、章嘉三世の未だ四歳、その入京以前の乾隆五十五年に、章嘉に代って、京師ラマの最高位の職務を署理するよう命ぜられたものとおもわれる。彼がその任にいつまで留まったかは不明である。なお彼の入寂の年次も今は分らない。

さて、チンレーギャムツォ以降のガルダンシレトゥーフトクトゥの轉生者については、妙舟（第五篇 pp. 131—133）がこれを傳えている。その内容については檢討すべき點もあるが、限られた紙數も盡きたので、それは今後にゆずり、今はそのまま錄するにとどめる。

第八世噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。誕於西寧密那克地方。道光九年。奉旨准在紫禁城騎馬。道光十八年。奉旨賞給食札薩克達喇嘛俸粮。是年十二月。奉旨補授副札薩克達喇嘛。

第九世噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。誕於西寧揣薩地方。光緒元年。補授多倫諾爾札薩克達喇嘛。光緒二十六年。京師兵燹。京倉仁壽寺被焚。所有印信案卷全行遺失。由本倉昵爾巴喇嘛丹增札木蘇。呈報理藩院。補領印敕。於光緒二十八年四月十一日。蒙理藩院奏准。敕書銀印遺失。請飭補鑄。奉旨依議欽此。欽遵敕書。於是年六月領出。嗣於光緒三十四年二月。由印務處領出禮部補鑄光字一百四十八號銀質銀印一顆。光緒二十八年六月。蒙理藩院奏准。噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。請賞朝車朝馬。奉旨照例賞欽此。欽遵。其年七月。在西寧貴德廳原籍地方圓寂。嗣於光緒三十一年十月。蒙理藩院奏准。奉旨賞給圓寂噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。看倉食二兩錢糧徒弟十五名。並留看倉蘇拉喇嘛三名。跟役班第六名。每月由印務處關領看倉錢糧二十四分。

第十世噶爾丹錫哷圖呼圖克圖。光緒三十三年十二月。誕於西寧曲嘎地方。由西寧辦事大臣會同達賴喇嘛。在西寧恭布木寺籤掣。作爲噶爾丹錫哷圖呼圖克圖之呼畢勒罕。民國元年。代表青海蒙番兩民族。輸誠內向。擁護共和。並貢長壽佛一尊。哈噠一方。氆氇四疋。特力默四疋。藏紅花二瓶。藏香六包。政府特嘉誠意。晉封妙悟安仁。民國四年。呈進萬壽佛一尊。哈噠一方。民國五年。西寧梵宗寺噶爾丹錫哷圖呼圖克圖倉之商卓特巴札薩克喇嘛羅藏散丹。呈進長壽佛一尊。哈噠一方。旋於其年六月十九日。賞給車臣綽爾濟。時噶爾丹錫哷圖呼圖克圖之呼畢勒罕。於民國五年二月二十六日。呈請坐床。二十八日。奉批令應准裁撤呼畢勒罕字樣。來京瞻覲。駐京當差。並支給錢糧。將前輩敕書。遵例送印務處。轉行更換。由理藩院補發新印。俟後隨時啓用。由蒙藏院援案。應給榮典。呈請政府。於四月十七日。奉大總統批令。准如所擬。給予榮典。以示優異。此令。賞坐黃轎並穿帶膝貂褂。五月三十日。率領徒衆三十人。出口躲熱。請假五箇月。繼因赴多倫諾爾學經。請假一年。十月。遣徒業喜桑布等十一人。赴青海原籍省親。民國十九年。中央召開西藏會議。代表青海全部藏族。來京出席。二十一年公畢回青。道經寧夏省屬磴口縣街。猝遭狙害。蒙旅緇素。聞耗悲痛。聯名呈請中央政府緝兇優卹。遣龕迎回青海大佛寺。唪經禮懺。由該省長官致祭後。轉運德欽寺供奉。

おわりに

以上、ガルダンシレトゥーフトクトゥの歴代の轉生者の生涯をある程度具體的に明らかにしえたようにおもう。ガルダンシレトゥーフトクトゥが駐京フトクトゥとなったのは、雍正年間にあり、ロブサンテンペイニマの代のことであった。それ以後、この駐京フトクトゥの地位は民國初年まで存續した。そもそも駐京フトクトゥは、一、二の例外を除いて、いずれも青海モンゴル族の間に尊崇あつい活佛から選ばれたものであった。彼等が敕命を以て京師に請ぜられたのは、時期的におおむね康熙の末年から雍正年間のことであった。この時期は、清朝の青海モンゴル族、さらにはチベットに對する支配力が貫徹して行った頃でもあった。清朝は、これらの活佛をそうした時期に京師に招いて、保護を加えることによっ

て、ラマ教界に對する最大の權威としての姿勢を具體的に誇示することができたともわれる。駐京フトクトゥは、そうした清朝の異民族統治策の一環として設けられ、以後永く維持せられたのであった。

註

① 光緒大清會典事例（以下、會典事例と略稱）卷九七四、理藩院・喇嘛封號に見える駐京呼圖克圖は次の如くである。

章嘉呼圖克圖 (J̌anggiya<Lcaṅ skya qutuγtu)
噶勒丹錫呼圖呼圖克圖 (Galdan<Dgaḥ ldan siregetü qutuγtu)
敏珠爾呼圖克圖 (Minǰul<Smin grol qutuγtu)
濟隆呼圖克圖 (J̌irung<Rje druṅ qutuγtu)
洞科爾呼圖克圖 (Dongqor<Stoṅ ḥkhor qutuγtu)
果鏻呼圖克圖 (Gomang<Sgo maṅ qutuγtu)
那木喀呼圖克圖 (Namka<Nam mkhaḥ qutuγtu)
鄂薩爾呼圖克圖 (Odser<Ḥod zer qutuγtu)
阿嘉呼圖克圖 (Akya<A kya qutuγtu)
喇果呼圖克圖 (Raqu<Ra kho qutuγtu)
貢唐呼圖克圖 (Gungtang<Guṅ thaṅ qutuγtu)
土觀呼圖克圖 (Togon<Thuḥu bkwan qutuγtu)

② Cf, Zuiho Yamaguchi (ed.), Catalogue of the Toyo Bunko Collection of Tibetan Works on History, Tokyo 1970., item. 103—1122, p. 38.

③ Cf, N. Poppe, L. Hurvitz, H. Okada (ed.), Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko, Tokyo 1964., item. 142, pp. 138—140.

④ その資格について、例えば、R. Kaschewsky, Die Äbte von Dga'-ldan. Zentralasiatische Studien 4, Wiesbaden 1970（以下、AG と略稱）, SS. 239—240. 參照。

⑤ K. Sagaster, Subud Erike „Ein Rosenkranz aus Perlen". =Asiatische Forschungen Bd. 20, Wiesbaden 1967（以下、SE と略稱）, S. 104.

⑥ ツの寺については、T. W. Wylie, The Geography of Tibet according to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad, Roma 1962（以下、GT と略稱）., pp.77. 參照。

⑦ Cf. GT, p. 84.

⑧ Cf. GT, p. 85.

⑨ Lokesh Chandra (ed.), Dpag-bsam-ljon-bzaṅ of Sum-pa-mkhan-po Ye-śes-dpal-ḥbyor. Part III, containing a history of Buddhism in China and Mongolia, preceded by the reḥu-mig or chronological tables. =Śata-Piṭaka Series Vol. 8, New Delhi 1959; Reḥu mig, p. 65.

⑩ AG, S. 284.

⑪ その文中の朱特多特の拉倉については、Rgyud stod grwa tshaṅ の謂であろうか。Rgyud stod grwa tshaṅ は、Rgyud

smad grwa tshaṅ と並んで、ラサの二つの主要なタントラ學院である（SE, S. 98 Note 154., GT, p. 150 Note 326）。因に、ガルダンシレトゥ＝ガワンロートェギャムツォは、一六七三（癸丑）年三月に、Rgyud smad (Smad rgyud) grwa tshaṅ の方の學院長に就任したことがある（KCPK, 14r; YSQB, 23v）。

⑫ KCPK には、實際には癸亥 chu mo phag（＝一六二三年）と刻されているが（YSQB も同様に usun eme ṛaqai）、それは正しくは乙亥となければならない。そのように改むべきことは、本傳自體に幾多の證例がある。例えば、ロートェギャムツォの十一歳は乙酉 ṭiṅ bya の年（一六四五）（Ibid, 4v）とあり、これから逆算しても、その生年は一六三五年とならなければならない。その他、干支と年齢との關係の記載の上で、一六三五年生誕説に齟齬を來す例はない。

かつまたこの一六三五年生誕は、『蒙古喇嘛教史』（ジクメリクペイドルジェ著・外務省調査部譯、生活社、昭和十五年。以下、ジクメと略稱）p. 277 及び、Zahiruddin Ahmad, Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century, Roma 1970（以下、STR, と略稱）., p. 265 等によっても、支持されるものである。

なお、W. Heissig, Die Pekinger lamaistischen Blockdrucke in mongolischer Sprache. = Göttinger Asiatische Forschungen Bd. 2, Wiesbaden 1954（以下、PLB と略稱）., SS. 103—104 に、YSQB の解題と内容梗概が述べられているが、そこではテキストの示す癸亥（一六二三年）がそのまま採られている。サガスター氏も同じ誤りを踏襲しているので（SE, S. 86）、敢えて一言しておきたい（序に言っておくと、同氏は、ジャムヤンタクルンタクパをロートェギャムツォの〝直接の先行者〟と言って（SE, S. 104）、スムパダムチョェギャムツォを忘れているふしがある。

⑬ その地は、尊者ロブサンタクパ Rje btsun Blo bzaṅ grags pa（＝ツォンカパ）の誕生地ツォンカ Tsoṅ kha の近傍（KCPK, 4v）に當るという。なお、ジクメ p. 277 參照。

⑭ この箇所は、KCPK には Goṅ ma no mon khaṅ に、YSQB には Abaγa nom-uṅ qaγan に作る。Abaγa を、ハイシッヒ氏は固有名詞として受取っているが（PLB, S. 103）、從い難い。これが何故 goṅ ma に相當するのか、よく分らない。goṅ ma は、通常〝前者、如前輩、前身。在上的。在前的〟の意味であり（格西曲札、藏文辭典）、abaγa は一番下の叔父（陸軍省編、蒙古語大辭典）の意味である。この〝前〟と〝一番下の〟と言うところに、意味上の共通點があるといえばいえそうである。

なお goṅ ma No mon khaṅ は、別の箇所では、shaṅ po Chos rje (naγaču Coyas rje) とも表現される（例えば、KCPK, 5r; YSQB, 8r）。

⑮ Erich Haenisch (ed.), Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtwerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen), Berlin 1955., 85v. 拙稿「蒙古ラマ教史上の二人の弘法者—ネイチ-トインとザヤ-パンディター—」（史林第五六巻第一號、特に頁七八、參照）

⑯ Eine Urga-Handschrift……, 86r.

⑰ この人が、妙舟のいう第十五世敏珠爾呼圖克圖、法號普爾來端住布である。そしてその次の轉生者、つまり第十六世敏珠爾呼圖克圖、法號洛布藏丹增（＝Blo bzań bstan ḥdsin）に至って、雍正五（一七二七）年ダライラマ七世より派遣されて晉京し、敏珠爾呼圖克圖の名號を頒給せられた。雍正十二（一七三四）年、敕旨を奉じて再び入京し、京師に職を任ぜられて、東黃寺に駐錫した（妙舟、第五篇 pp. 125—126）。

こうして駐京フトクトゥとしての敏珠爾呼圖克圖は誕生したのである。

⑱ トェサムリンは、タシルンポの三つの學院 grwa tshaṅ の一つである（GT, p. 137 Note 200）。

⑲ どのような身分かよく分らない。モンゴル譯には、Lhasa shabs druṅ とある。

⑳ ジクメには、これを、三月二十一日といわず、「二十七歲の終りに」という時期に置いている。

㉑ 注⑪、參照。

㉒ Cf. GT, p. 77.

㉓ レボン寺の學院の一つである（Cf. GT, p. 79）。

㉔ STR, p. 265.

㉕ サンギェギャムツォはロートェギャムツォの出發に先立って、これにエルデニダライシレトゥーフトクトゥ Er te ni da las ci ral thu kho thog thu (Erdeni dalai siregetü qutuγtu) の稱號を授けたという（STR, p. 265）。

㉖ 例えば、STR, pp. 263—268., SE, SS. 86—89. 參照。

㉗ 哲卜尊丹巴呼圖克圖が噶爾丹西勒圖と〝並坐〟したことが、ガルダンの怒りを買ったという（蒙古回部王公表傳・卷九一、西藏總傳）。

㉘ 兩翼汗の紛爭から、ガルダンの左翼土謝圖汗領侵入までの經緯については、皇朝藩部要略・卷九（十九丁裏—二十丁表）の記事が比較的要領を得ている。左の如くである。

先是噶爾丹牧。東鄰喀爾喀。久涎富庶謀往掠。又怨喀爾喀土謝圖汗察琿多爾濟。嘗助鄂齊爾圖（＝ジュンガル－ホショト部の舊部長。ガルダンと對立を來して敗れた）。且以女妻鄂齊爾圖孫羅卜藏袞布阿喇布坦。欲攻之。會察琿多爾濟。匿札薩克圖汗成袞逃衆。與成袞構釁。成袞卒。子沙喇嗣。釁如故。達賴喇嘛遣使噶爾旦西勒圖。召察琿多爾濟。與沙喇盟于庫倫伯勒齊爾。察琿多爾濟弟哲卜尊丹巴呼圖克圖。與噶爾旦西勒圖抗禮。噶爾丹因以責哲卜尊丹巴呼圖克圖。不敬達賴喇嘛爲名。誘沙喇往會于固爾班赫格爾。察琿多爾濟邀殺沙喇。又追殺噶爾丹之弟多爾濟札卜。進屯喀喇額爾奇克・察罕額爾奇克地。與噶爾丹相拒。噶爾丹乃引兵三萬。由杭愛山入掠。

〔以下略〕

㉙ ジクメ p. 279 に、この文に對應する記事があるが、はるかに簡略である。特に、遣使の目的、會盟等に關して全く述べる所が無いのは遺憾である。なお、そのラサからの出立を丁卯（一六八七年）とする誤りも犯している。

㉚ ここで、これまでの章嘉とガルダンシレトゥとの關係について一言しておくと、章嘉は、少年時代を鄉里アムドで過したのち、一六六一年ラサへ來て、レボン寺のゴマン學院へ入學し、

一六七三年までここで研鑽を積んだ。而してその間、その院長は、最初、上述のガワンチンレーフンドゥブであったが、一六六五年、ガルダンシレトゥ=ロートェギャムツォが交替就任した。ここに、これと章嘉との間に、前者の入寂に至るまで續く所の師弟關係が始めて生じた。就中一六八三年、章嘉がアムドのゴンルン寺へ歸るまで、彼はロートェギャムツォの常隨の侍者（tabiṙči, shabs phyis）であった（Cf. SE, SS. 98—99）。

㉛ その解題については、Cf. SE, SS. 28—36.

㉜ クンブム Sku ḥbum 寺（＝塔爾寺）の付近にあった大バオsgar の内で涅槃に入ったといわれる（KCPK, 18v ; YSQB, 32r）。

㉝ SE, S. 88., STR, p. 268. STR, loc. cit によれば、その訃報がラサに屆けられたのが、同年蒙古暦三月十日のことであったという。なお、KCPK 自體には、入寂年次を記していない。

㉞ なお、ガルダンシレトゥの使節行に關するKCPK の記事は、上述の如くであるが、内容に著しく生彩を缺く感は否めぬであろう。これについて、KCPK 自身次のように釋明する。

この傳記は、尊者ジャムヤンシェーパの怖畏教法源流から取ったものであるが、そこには、中國、モンゴル方面へ赴かれた後の傳記を置いていず、その前後の傳記にも一向に詳細がない。また他の傳記の記事の類も見なかったので、ここでは、差し當ってこの程度である。

rnam par thar pa ḥdi rnams rje ḥjam dbyaṅs bshad pas mdsad paḥi ḥjigs byed chos ḥbyuṅ nas blaṅs pa yin la / der rgya hor phyogs su phebs pa phyin gi rnam thar ma ḥkhod ciṅ / de sṅa phan gi rnam thar laḥi ha caṅ gi shib rgyas med pa daṅ / rnam thar gyi yi ge gshan maḥi rigs kyaṅ ma mthoṅ bas ḥdir re shig de tsam mo / (17v ; YSQB, 30r)

右にいうジャムヤンシェーペ Ḥjam dbyaṅs bshad pa 一世（Ñag dbaṅ brtson ḥgrus 1648—1722）の怖畏教法源流 Dpal rdo rje ḥjigs byed kyi chos ḥbyuṅ khams gsum las rnam par rgyal ba dgos grub kun kyi gter mdsod（一七一八年撰）については、左記の書に詳しい解題が見える。就きて參照されたい。

А. И. Востриков, Тибетская историческая литература, Москва 1962, стр. 108. なお、バイシッヒ氏が、前掲文にふれて、YSQB に會盟の詳細が見えないのは、ダライラマ七世が黄教とガルダンの反亂との關係の微妙な話題に言及するを欲しなかったからではないか（PLB, S. 103）、といっているが、そうかもしれない。

㉟ Čaγan nom-un qaγan は、雍正三（一七二五）年清朝によって青海に旗制が施行されたとき、扎薩克喇嘛を授けられ、四佐領を管轄して一旗をなすを許された。その牧地は、乾隆十三排圖（蘭州府・西寧府）に、碩爾郭爾必拉の上流にある察漢納門漢と標されるところである（佐藤長、近世青海諸部落の起源（下）、東洋史研究第三二卷第三號、一九七三年、特に頁八四、參照）

㊱ この人物は、殘念ながら、比定できない。

㊲ その位置は次のように言われる。

青空が地に溶いた油を圍繞した如き萬流王湖（ココノール）の西方、マンユル Maṅ yul 砂漠の一部に屬する東山なる羅刹山脈 Srin poḥi ri gyud が右へ灣曲し、南にサルルン Gsal luṅ 山、西に白峰 Brag dkar (Čaṛan qada)、雪山 Gaṅs ri の連らなりあり、北に黄河と稱される大河が悠然と流れる……ヤンサンと言われる地（KCPK, 18r/v; YSQB, 31r/v）。

㊳ この間の經緯については、SE, SS. 224—232・65r—73v にも述べられている。ただしテンペイニマ傳のものと、事實の經過において若干のくいちがいがある。その基本的相異は、SE にあっては、一六九〇年章嘉はダライフンタイジの本營でツァガンノムンハンと會見した折、これと化身の問題を「入念かつ詳細に協議した」が、一六九二年に至って化身の出現を敎えられた、等という點にある。詳しくは、SE, SS. 102—103 に一應の對比が試みられているので、就きて參照ありたい。

㊴ 顧實汗の子の達賴巴圖爾多爾濟 Dalai baṛatur Doṛji を指す。彼は早くから青海諸タイジの代表的存在であったといわれる（佐藤長、前揭論文、特に頁六一—六三、參照）。

㊵ このとき章嘉はゴンルン寺座主を辭して（在位1688—1690）、同寺のジャンチュブリン Byaṅ chub gliṅ 寺に住したばかりのころであった（SE, S. 101, S. 224・65r）。

㊶ その名を、ガワンロブサンタシ Ṅag dbaṅ blo bzaṅ bkra çis という（KCPK, 19v; YSQB, 33v）。

そのデチェン寺は、GT, p. 107 にみえる La moḥi bde chen と同一であろう。その位置については、同書 p. 192 Note 725 參照。Reḥu mig, p. 73 によると、「庚申（一六八〇）、チャガンノムンハン Cha kwan no min han によってラモデチェン La mo bde chen の礎が定められた」とみえている。なお KCPK, 18v—19r によると、ガルダンシレトゥがクンブムの近くで涅槃にまさに入らんとした頃、ツァガンノムンハン兄弟がこれと謁して、シレトゥから、デチェン寺 Bde chen dgon の建築は完成したかと問われた。まだ完成していないと答えると、早く完成せよ、私もそこへ行かないとは限らない、と仰せられた、などと書かれている（因にこの話は、ガルダンシレトゥの化身がデチェン寺に將來招ぜられることを懸記した意味に解せられる）。

㊷ このラマについては、外藩蒙古回部王公表傳・卷八一、青海厄魯特部總傳の康熙三十五年の條に、左の如く見ゆ。

善巴陵堪布。蓋達賴喇嘛遣理蒙古務者也。

STR, p. 277, 302 によれば、チベット文獻に見える Mkhan po of Byams pa gliṅ (Blo bzaṅ doṅ grub) に比定せる。

㊸ 外藩蒙古回部王公表傳・卷八一、青海厄魯特部總傳。

達什巴圖爾については、佐藤長、前揭論文、特に頁七〇、參照。

㊹ このとき、ジャムヤンシェーパ一世 Ṅag dbaṅ brtson ḥgrus にあっては、レボン寺のゴマン學院長を辭し（在任1700—1707）、一七〇九年鄉里アムドへ歸る途中の出來事であった。翌一七一〇年、彼は鄉里に有名なラブラン寺 Bla braṅ bkra çis ḥkhyil を建立した（Lokesh Chandra, Materials for a History of Tibetan Literature, Part I, New Delhi 1963, pp. 45—46）。

㊺ この間の經緯については、佐藤長、ロブザンダンジンの反亂

について、史林第五五巻第六號、一九七二年、參照。

㊻ KCPK では、この地名を Maṅ ra と表記する。その位置については、注㊺、參照。

㊼ この人物は、別に察罕丹津 Čayan danjin とも稱される。雍正初年における青海右翼の二巨頭の一人であった。その經歷等については、佐藤長、近世青海諸部落の起源(上)、東洋史研究第三二卷第一號、一九七三年、特に頁百二に詳しい。就きて參照されたい。

㊽ ココノールの南方、マチェンポムラ Rma chen spom ra 山の北東一帶の地名である (Cf. GT, p. 105)。

㊾ この間の事情については、L. Petech, China and Tibet in the Early 18th Century, Leiden 1950, p. 142 f. に詳しい。就きて參照されたい。

㊿ Včir dhar-a ljang sky-a lalita badsar-a jña-a šasin-a dibi srii badr-a-yin čadig siisüg-ün lingqu-a-yi teyin böged neggeči naran-u gerel kemegdekü orusiba (以下、JLBC と略稱)., 56v. [本書は、一七八七年 Ačitu erdeni Ču bzang (Chu bzaṅ) nom-un qayan Ṅag dbaṅ thub bstan dbaṅ phyug 撰。東洋文庫藏。Cf. Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko, No. 136]

(51) 駐京喇嘛の最高位者たる掌印札薩克大喇嘛(定員一)(大清會典事例・卷九七四、理藩院・喇嘛封號)を指すと考える。その職は章嘉呼圖克圖にのみ授けられるものである。

(52) 前述の如く、京師の掌印ラマに任ぜられたのは、この年八月のことで、ドロンノール滞在中の出來事であった。なお、その地位を命ぜられるについては、土觀 Thuḥu bkwan フトクトゥの上奏に據るという (KCPK, 36r; YSQB, 58r)。

土觀フトクトゥ(二世)は、その名をガワンチョエキギャムツォ Ṅag dbaṅ chos kyi rgya mtsho といい、一六八〇(康熙十九)年に生まれ、一七一五(康熙五十四)年京師に來錫、一七三六(乾隆一)年入寂した (Lokesh Chandra, Materials for a History of Tibetan Literature, Part I, p. 54)。その間一七三四(雍正十二)年、靜修禪師に封ぜられ、敕印を給予された(會典事例・卷九七四、理藩院・喇嘛封號)。その傳記は、ジクメに特に一章が設けられて詳細である (pp. 288—295)。就きて參照されたい。

(53) 法號洛布藏丹增(=Blo bzaṅ bstan ḥdsin)。雍正五(一七二七)年入京して、敏珠爾呼圖克圖の名號を授けられた。一旦歸國してゴマン寺に坐牀、雍正十二(一七三四)年旨を奉じて京師に來錫。乾隆元(一七三六)年ドロンノールで入寂した(妙舟、第五篇 pp. 125—126 參照)。

(54) この條の記事は、JLBC, 59r/v にほぼ全文が引用されている外、ジクメ pp. 296—297 にも簡略化されて取り入れられている。就きて參照されたい。

(55) 新寺院建設から、この皇帝臨御までの KCPK の記事は克明をきわめるが、ここでは一部分を引用したにすぎない。この箇所はほとんど逐語的に JLBC, 61v—66v 及びジクメ pp. 298—300 に引用されている。就きて參照されたい。

(56) 妙舟の誤解について考えてみると、王公表傳・卷七〇、扎薩克和碩超勇襄親王策棱列傳に、策棱(乾隆十五年沒)に八子ある

内の第六子に西勒圖呼圖克圖なる者があることに由來するのかも知れない（その長兄が成袞扎布）。しかしこの西勒圖呼圖克圖をテンペイニマの化身とみなすには、年代的にも矛盾があって、無理である。

㊼ この夢判斷と出生地との關係はよく分らない。博雅の士の示教を乞う。

㊽ Ḥbum luṅ bkra çis thaṅ はチュブサン寺 Chu bzaṅ dgon の建つ地で、ゴマン寺の東方にあたる（Cf. GT, p. 195 Note 759）。

㊾ 章嘉はその晩年、目が不自由であったといわれるから（嘯亭雜錄・卷八、章嘉國師の一節に、晩年病目。能以手捫經典。盡識其字。人爭異之）、そうしたことから來る所作かもしれない。なお章嘉は乾隆五十年に七十歲。その翌年入寂した。

㊿ ジクメでは、その名を、「大座者最勝呼畢勒罕寶なる毘紐奴喇嘛ガワントゥプテンワンチュクペンデンチンレーギャムツォ Ṅag dbaṅ thub bstan dbaṅ phyug dpal ldan ḥphrin las rgya mtsho」という。

A Study of the *Γaldan siregetü qutuγtu*

by Hiroshi Wakamatsu

In the Qing 清 period, the *qutuγtu* stationed at Peking were called "*qutuγtu* resident in the capital"(駐京呼圖克圖). The well-known *lcaṅ skya qutuγtu* 章嘉呼圖克圖 occupied the highest position among them. The next highest was occupied by the *Γaldan siregetü qutuγtu* 葛爾丹錫哷圖呼圖克圖. Here an attempt is made to clarify the biographies of successive incarnations of the *Γaldan siregetü qutuγtu*, especially the first, Nag dbaṅ blo gros rgya mtsho (1635–1688), and the second, Blo bzaṅ bstan paḥi ñi ma (1689–1746?). The *Khri chen sprul paḥi sku blo bzaṅ bstan paḥi ñi ma dpal bzaṅ poḥi rnam par thar pa dpyod ldan yid dbaṅ ḥgugs paḥi pho ña*, written by the seventh Dalai Lama, is a very important and reliable source for the first two biographies.

In addition, following Master Miaozhou's 妙舟法師 *Mengzang fojiaoshi* 蒙藏佛教史, the author examines the lives of later incarnations up to the beginning of the Republican period. Through this article, which is a result of the author's researches on the *qutuγtu* resident in Peking, the real nature of Qing policy towards the Lamaists is clarified.